武士の娘

杉本鉞子 著

大岩美代 訳

ちくま文庫

ちくま文庫

武士の娘

一九九四年一月二十四日　第一刷発行

著　者　杉本鉞子（すぎもと・えつこ）
訳　者　大岩美代（おおいわ・みよ）
発行者　森本政彦
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―六―四　〒一一一
振替東京六―四一二三
〇四八―六五一―〇〇五三（サービスセンター）
装　内　
装幀者　安野光雅
印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　株式会社積信堂

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取替いたします。
© MIYO OIWA 1994　Printed in Japan
ISBN4-480-02782-3　C0123

ちくま文庫

武士の娘

杉本鉞子
大岩美代 訳

筑摩書房

目次

一　越路の冬　9
二　縮れ毛　21
三　寒稽古　29
四　旧と新　39
五　落葉　50
六　お正月　61
七　父の苦衷　71
八　二つの冒険　81
九　盂蘭盆　95
十　酉の日　109

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

十一　初旅　121
十二　旅に学ぶ　129
十三　外国人　142
十四　学課　153
十五　受洗　163
十六　渡米　177
十七　第一印象　192
十八　風習のちがい　212
十九　思うこと　227
二十　となりびと　239
二十一　新しい経験　252
二十二　異郷の花　270

二十三　千代　282
二十四　東京の家　297
二十五　困ったこと　307
二十六　お祖母さま　316
二十七　無縁仏　329
二十八　日本の婦道　338
二十九　姉の家で　349
三十　死蔵の宝　363
三十一　黒船　374
訳者あとがき　379

武士の娘

一　越路の冬

外国の方々は、よく日本を日の照る国、桜の花さく国とおっしゃいますが、これは大方の観光客が、年中気候の温和な東部や南部ばかりを見物されるからでありましょう。裏日本の海岸などでは、十二月から三、四月まで雪につつまれてしまうところがございます。

私の郷里、越後の国では、冬は何時も大雪ではじまり、しんしんとおやみなく降りつづき、藁葺屋根の太い棟木のほかには、何も見えなくなるまでにあたりを埋めつくしてしまいます。そうすると、簑笠をつけた人足達が、手に手に木鋤を持って、道路の一方から他方へぬける雪のトンネルを掘ります。冬の間じゅう道のまんなかの雪はとりのけられもせず屋根を凌ぐほどに高く積っていました。人足達は時々、信濃川まで雪を流しに参りますためにこの雪の山に段々をつけました。私達子供はそれをよじのぼっては、その頂きを駈けまわったものでした。そして、時には、雪に埋れた村落を救いにゆく武士のさまをしたり、掠奪に出かける義賊を真似て忍び足に歩きまわったり、色々な遊びをいたしました。

が、私達子供が喜んで心躍らせた時季は、雪のくる前、町中が冬支度に忙しい頃であり

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

ました。この支度には何週間もかかり、毎日、学校のゆきかえりに立停っては、人足達が忙しそうに路傍のお地蔵さまや小さい祠に、藁で作った冬衣を着せるのを眺めたものでございました。庭の樹木も植込も石燈籠も藁でつつまれました。お寺の壁まで莚で包み、ところどころを竹の押ぶちで抑えたり、大げさな藁縄の網をかけたりいたします。日毎に町の様子が改まり、お社の石段の上の大きい狛犬に藁がこいがすむ頃までには、町中は大きさも形も様々な藁のテントにつつまれて、グロテスクな様に変り、三ヵ月も四ヵ月も家々を埋めてしまう大雪の来るのを待ちかまえていたものでありました。

大きな家は大てい、昔風の廂の深い藁葺屋根でしたが、街々の商家の、柿葺の屋根の横木には、春の雪解のはじまる時のなだれを防ぐために、石が載せてありました。この廂屋根が長くつき出していて、冬になりますと、上部に油紙をはった障子板を歩道にはめますので、そこは忽ち床のない廊下に変り、人々ははげしい吹雪の折にも、ことなく往来ができるのでした。光はこの油障子を通して射して参りますので、その廊下は僅かながら雪明りがして薄暗くはありましたが、真暗というのではありませんでした。街角の雪のトンネルの交叉点では大きい文字なら読める明るさでした。それで、たびたび学校の帰途、仲好しのお友達と、トンネルの間で本を拡げては、雪あかりを頼りに勉強したという昔の学者をまねてみたりしたものでございました。

その名も「山の後方」を意味する越の国は、蜿々とつらなる三国山脈に隔てられていま

すので、封建時代の初めまでは、ここは氷にとざされた僻地と考えられ、地位も高く権勢ある人々で、罪人扱いもしにくいものを流すには恰好の地とされたものでした。こうした人々の中に、その時分の改革者があったわけでした。当時の日本は、政治上にも、宗教上にも、革新ということに対しては、仲々きびしく、殊に大宮人の中で、進歩的な考えをもつ人々や、覇気のある僧侶たちは、一様にいとわしい汚名を被せられ、何処か僻遠の地に送られ、永久にその志を挫かれたものでありました。越の国に流された政治犯の人々も、仕置場の彼方の小さな墓地に埋れたり、貧しい農民の中にその姿を消してしまうのでした。富も位もただならぬ若者が巡礼の姿に身をやつし、行方も知れぬ父のあとをたずねて、越路の村々をさまよい歩いたなどという悲しい物語の数々が、今も日本の文学にのこっております。

それにくらべますと宗教改革者達の生活は楽でした。大方は人々にたち交って、黙々として目立たぬように働きながら日々を送るという風でありました。流罪に一生を終りながらも、新しい仏教の宗派を起した祖師達は、偉大な方々でありましたので、やがてその信仰は広まり、遂に越後は日本きっての新宗派の根拠地として知られるようになりました。そんなことから私もごく幼い頃から、お寺さまのお説教は聞きなれており、自然石に彫り込んだお像や、山かげの洞穴の中のお地蔵様など――これらはみな、昔のお坊様の倦むことを知らぬ手になったものでありましたが――をも見なれていました。

私の家は長岡の城下町にあり、私どもの家族は父、母、祖母、兄、姉、私を加えて六人でありました。それに、父の下男頭の爺や、私の乳母のいし、外にきんととしという女中もいました。法事などのときは昔からの出入りのものが手伝いに参ったものであります。また私には他家へ嫁いだ姉達がありましたが、婚家はみんな遠方でございました。唯、一番上の姉だけは長岡から人力車で半日程の所に住んでおりましたので、この姉は時折り訪ねて参ることもあれば、時には私も姉についてその家へゆき、数日泊ってまいることもありました。この姉の家は農家で、ずっと昔には三ツの山も持っていたとか聞いております。武家の娘はよく農家に嫁いだものでありましたが、これと申しますのも、農は士に次ぐ階級として尊ばれ、「米のなる木のその山里は、神代ながらの大黒柱」などという百姓衆の元気なうたを幼い頃からよくきかされたものでございました。

私共は町はずれのむやみにひろい家に住んでおりました。私が物心ついてからでも、時折り建増しをしていましたので、部厚い藁葺屋根は切妻のところで傾き、壁には凹凸だの、しみのついたところだのありました。大小様々の部屋が曲りくねった細い廊下で奇妙なつながり方をしておりました。家をとりまく石の築地の上には、低い板塀がついておりました。大門の屋根は四隅で軽く反り、朽葉色の藁屋根のそこここには、苔さえむしておりました。扉は頑丈な鉄の蝶番で支えられ、それが装飾的に扉のなかばまで伸びていました。門の両側は塗壁になっていて、細長い格子つきの窓がつけてありました。昼間は門はあい

ておりましたが、夜はこの戸を叩いて「頼もう頼もう」の声がかかりますると、たとえそれがよく聞き知った近所の人の声でありましても、昔かたぎの爺やは必ず馳けてゆき、小窓からのぞいて、その客の顔を確めた上でなくては、扉を開けようとは致しませんでした。

門から玄関までは、凹凸の多い飛石づたいになっており、その石と石との間には、私が生れて初めて見た外国の花――爺やは「巨人の釦」と呼んでいましたが、草丈けの低い、丸い花のさくものでした――が咲いておりました。誰かがこの花の種子を爺やに呉れたのですが、爺やは多分このお庭へ異国の花など植えてはもったいないとでも考えたのでしょう、気を利かして人の足に踏まれる通り道を選んで蒔いたのでした。ところが、大変丈夫なこの花は、苔のようにどんどんひろがったのでした。

私の家がこんなに一時凌ぎの間に合わせものでありましたのも、御維新の悲劇の一つのあらわれともいえるかと存じます。越後長岡藩は幕府政治を支持した藩でございました。ここの人々にとっては、至尊が御親ら戦さのことや政治向のことにかかわり給うことは余りにももったいないことと考え、祖先代々忠勤をはげんでまいりました将軍家のために戦ったのでありました。当時父は祖父の急死により、七歳の時から相続していた家老の地位にありました。国家老という重い責任をもつ身でありましたので、御維新の騒ぎの間、父は随分と苦労をいたしました。

越後が負け戦だと知った時こそ、長岡方の悲運の瞬間でありました。夫の信奉していた

ところが破れて、とらわれの身となったことを知りました時、母は、家族をつれてのがれ、家屋敷が敵の手に落ちることをいとうて、自らこれに火をかけ、山かげから我が家の焼け落ちるのを見守っていたと申します。

戦の嵐もすぎ、中央政府の樹立をまって、公の地位を退きました父は、陸に上った魚にも似た家の子達に、僅かに残った家財道具をまとめて分け与え、その後この仮住いを下屋敷に建てたのでありました。それからは、近くの僅かばかりの土地に桑畑をつくりなどして、身を農夫に落したことを誇りにしておりました。武家育ちの父は、商売については全く無智でした。それに金銭にかかわることは、武士の恥辱と見るならわしもありまして、事務的の事の一切は、忠実な、然しこれも全く無経験な爺やの手にゆだねて了い、父は読書や昔の思い出に耽りながら、新しいこと、その時分でいう文明開化の品々を初め、革新的な思想を紹介したり致しました。が、この父の理想は、時代に無関心な隣人には甚だ迷惑千万なことばかりと思われたに違いありません。

そういう間にも、父はたった一つの贅沢をやめようとは致しませんでした。御維新前には、御家老は参勤交代の制により、二年に一度はお江戸へゆかなければなりませんでしたが、今は非公式の旅行と変り、父は笑って、この旅行のことを「文明開化の窓」と申しておりました。この言葉はよくこの旅行の意味を語っていると思います。と申しますのは、この父の年毎の旅は、家族一同に日毎に進みつつある日本の姿をおぼろげながら、描いて

くれたものでした。それに、父は珍しい東京の様子を話してきかせるばかりでなく、色々なお土産を買ってまいりました――召使達には小間物、子供達には玩具、母には便利な道具の数々、祖母には見たこともないような輸入の品など。一度、父はお土産に、燧石のいらない附木と五色七色の泡玉の作れる小さい四角なお薬（石鹸）を持って帰りましたが、その時のうれしさは今でも忘れることができません。

この旅には、いつも爺やがついてまいりました。そして事務的な一切のことを引受けておりました関係から、商人との接触もでき、外国人が日本人相手の商売でつかうやり口なども聞きかじっていたようでありました。外国人の商い上手は誰も認めていたことで、日本人は損をさせられながらも、感嘆して、何とかして真似てみたいものだと願っていたようでありました。爺やほど正直な人も世間にはあまりなかったでしょうが、この爺やが、大切な主人のためにという忠義一方の考えから、家名を汚すようなことをしでかしてしまい、それが片付くまでには何月もかかり、相当のお金もつかったことがありました。実際、今でも私は、その事件は、きまりがついて後も、誰にもはっきりとのみこめなかったのではないかと思っております。爺やにとっては、生涯、むずかしい謎のように思えてならなかったことでございましょう。

その事件というのはこうです。

ある時、爺やが外国人相手の仲買人で、近隣一帯の村落から、蚕（かいこ）の種紙を買い歩いてい

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton